



M.ヴェーバー『倫理』論文における社会的分業の教育認識とその史的意義：
互酬的交換の理念と「共通善」社会にむけた

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2014-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河原, 国男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/4824

M. ヴェーバー『倫理』論文における 社会的分業の教育認識とその史的意義 —互酬的交換の理念と「共通善」社会にむけた—

河原国男

**Max Weber's understanding on education for social division of Labor in
'the Protestant Ethic' and its historical significance:
The principle of reciprocity and 'common good' of society**

Kunio KAWAHARA

1. 課題と方法

本稿は、マックス・ヴェーバー(Max Weber, 1864-1920)¹⁾の『倫理』論文の社会的分業に関する歴史記述から、「共通善」社会を構成する主体の形成に関するヴェーバーの認識を摘出し、その特質と史的意義を究明する。

こうした本稿は次の基本的な問いにかかわる。諸個人が孤立を経験しながらも、どのように自律性を確保しつつ、相互依存関係の重要性を認識し、協働できるか、という問いである。これは、本稿の内容に即せば二つに分けられる。一つは、労働とりわけ社会的な分業がその協働行為として期待されるならば、この行為はたんに部分労働として断片化せず、倫理的にどう正当化根拠をえられるか、という分業行為の意味の問い、もう一つは、倫理的に正当化される分業行為があり、その行為を可能にする素地（人間の生来的素質、近隣共同体、神性の「所有」など）を想定できた場合に、その自然的所与にまかせて自己活動的に育成できるのか、それとも行為主体の形成をめざして、自己もしくは他者による、なにかしらの自覚的な努力を要するか、という教育の問いである。

こうした問いを根底に、本稿は論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」をとりあげる。初出は1904-05年(以下、原論文)であるが、本稿では1920年改訂版をとりあげることとする。『宗教社会学論集』第3巻に収録されているこの改訂版を、以下『倫理』論文と呼ぶ。16-17世紀の「禁欲的」プロテスタンティズム諸派では、世俗内労働を職業的使命とする観念が、人々(信徒)に持続的に共有された「倫理的な」習慣となったこと、そしてこの「倫理的な」習慣がヨーロッパに成立した資本主義の経営と「『適合的』」²⁾で、「(近代)資本主義の精神」として意図せざる「推進力」(RS I, S.49)となったこと(ヴェーバー・テーゼ)を論証している³⁾。注意したいのは、こうした「精神」のその後の動向に関する『倫理』論文中のヴェーバーの所見である。現代-ヴェーバーに即せば20世紀初頭-では、人間を労働組織のなかに「営利機械」として自発的に隷属させる「倫理的基礎」となると、かれは警告的に指摘した(Ebd., S.190)。この“陰”の部分が『倫理』論文主題にとって本質的かどうかは議論がある⁴⁾。この

点については、本稿は問わない。検討したいのは、論文末尾に記された、隷属とは別の思想的展開の可能性である。「それとも、かつての思想と理想の力強い復活がおこるのか」(Ebd., S.204)。複数の可能性の一つとして、そうかれは問いかけていた。それを本稿は、対象の「志向」(Gesinnung)に即して教育領域に示された、思想的展開の可能性としてうけとめたい。

「かつての」とは、近代成立期の禁欲的プロテスタンティズム諸派、とくにカルヴィニズムのBerufとしての「『職業義務』の思想」を指す。「使命」として意欲し「禁欲的」に取り組むことが要請される職業労働だった。しかし、「清教徒の精神生活全体にとって重要なことは、神の選民たらねばならないとの信仰が、彼らのうちに大規模な復活(Renaissance)をみたことである」(Ebd., S.182)とのヴェーバーの所見を重視すれば、さらに原初的には古代にまで遡りうる。ゾンバルト『ユダヤ人の経済生活』(1911)の原論文批判をうけて改訂された『倫理』論文と同時期、1917-1919年に『古代ユダヤ教』をかれは発表していた。この論文には、「残株の落ち穂は畑に残しておかねばならぬ」という「申命記」(24の19)からの引用とともに、“共助”を行為の中心規範とする共同体意識との関連で、その構成員を形成する「教育」のありようが記述されていた⁵⁾。『倫理』論文でも上記テーゼにかかわり教育認識が見出されるとすれば、その教育認識は、選びの説の「復活」とともに発展的な形で“共助”にかかわる展開が示されていたのではないか。周知のように、カルヴィニズムでは「隣人愛」「共通善」の表出として分業労働が把握されていることをかれは『倫理』論文で指摘した。資本主義が私的所有と商品交換を原則として資本の蓄積増殖を至上命令とする社会制度であれば、その制度を基礎づける「精神」の史的成立とともに、“交換”を原則とするも、倫理的な価値関心から、互酬性を原則⁶⁾として分業を基礎づけ、行為主体の形成をめざす教育(観念)の史的成立を、当の論文は記述していたのではないか。労働、とりわけ社会内の分業が、自然的所与(摂理も含め)ではなく、人間の主体的作為に対する原理的な尊重とともに、社会的に組織された分業として把握され、そして、「隣人愛」「共通善」⁷⁾と価値関係づけられている例にかれが着目し、一連の系列に位置づけていること、その点を本稿は『倫理』論文のヴェーバーの認識として摘出したい。その場合、留意したいことは、その社会秩序形成の課題を特徴づけている一つの前提である。当の秩序構成員として期待される諸個人が、徹底した孤立化を経験している、という事態である。その困難を前提としたとき、諸個人と職業的課題とはどう適合関係を構築できるのか。そのために、人間自身とその社会関係に価値的変化をもたらす、どのような教育が要請されるのか。「教育作用」(以下、引用中の傍点は原文隔字体、Ebd., S.197)に対するヴェーバーの問題関心は、この論文でもけっして付随的ではなかった。この問いを教育学研究の立場から重視すれば、互酬的交換の論理とその展開を、教育領域に構成できるのではないか⁸⁾。

こうした研究課題に、先行研究はどう接近してきただろう。実証の事実的妥当性の検証や、近代化擁護と近代化批判など、『倫理』論文はいまなお研究史で多様なアプローチや解釈を可能にするが、エートスといわれる倫理的な習慣行為にかれが着目したという基本理解は共通する。しかしその行為態度がどう史的に形成・展開したかという点を重視し、教育認識を示すものとしてヴェーバーの論証を徹底して再構成するアプローチは、いまなお課題を残している⁹⁾。「労働が絶対の自己目的であるかのように勤しむ精神」が「長日月の『教育』の結果としてのみ生じうる」(Ebd., S.46)という所見に示される、「世俗内禁欲」の職業労働に関するかれの教育認識は、『倫理』論文の対象の分析のなかで通底していたであろう。その場合、社会的行為に着目するこの論でも、人間と社会に関する基本的問いにかれはむき合い、旧約理念を含む宗教社会

学的実証を通じ、収益性を追求し、「経済的淘汰」(Ebd., S. 37) が進行する資本主義からは導出できない、超越性の理念にも注意し、もう一つの社会を倫理秩序として確認し、その秩序構成主体の形成にかかわる社会教育の事実とその思想を跡づけていたのではないか。対象のプロテスタンティズムの「志向」そのもの-資本主義の「精神」といった「帰結」ではなく、「志向」そのもの-に対するヴェーバーの認識関心に即した、こうした仮説を立て『倫理』論文の教育認識を構成し¹⁰⁾、その特質と史的意義を究明することを本稿の課題とする。

この課題に次のように接近する。1 において思想史的前提として二局面にふれる。一つは先行したカント (Immanuel Kant, 1724-1804) の義務論、スミス (Adam Smith, 1723-1790) の分業論、マルクス (Karl Marx, 1818-1883) の疎外論である。これらはプロテスタンティズムの「職業義務」の思想に関し、ヴェーバーがどのような教育認識を示したか、その基本的性格づけの点で重要な視点を呈示していた。もう一つは「職業義務」の思想を示すエートスの主体 (社会層) にかかわるヴェーバーの認識である。とりわけかれ自身のアメリカ体験に関する結社の人間形成についての認識と、工場労働調査論での教育認識が重要である。以上をふまえて 2 において『倫理』論文をとりあげ、「職業義務」を実践し、分業労働に励む行為主体の形成に関するヴェーバーの教育認識を辿り、3 において、その教育認識と『古代ユダヤ教』での原初状態の認識との関連をふれる。そして、『倫理』論文を同時代に位置づけるため 4 において、デュルケム (Émile Durkheim, 1858-1917) トレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923)、ジンメル (Georg Simmel, 1858-1918) らの社会学の所見と対比し歴史的意義を究明する。

2. 『倫理』論文の思想史的諸前提

1) 先行者の教育認識

i) 「義務の履行」の意義

人間には、社会を形成しようとする自然的素質とともに、孤立しようとする非社会的傾向性もあるという資質をカントは認識し、この両面をふまえ、人間が「公民」としてどう主体形成できるかという課題が導かれることを、「公民的見地」から論じた¹¹⁾。各人の意志の自由 (服従する自由も含む) を前提にしたこうした課題との関連でカントは、「多数の人間の結合」に属し、「公共体を形成」するという実践的規則を、道徳的法則の遵守にかかわる「無条件的義務」の履行の一つと捉えた (『理論と実践』第 2 章、ホッブスに対する反論)。

ii) 社会的分業を通じての諸能力の発展

スミスは分業が生産力の基礎として捉えたうえで、その分業が「交換する」という人間の本性とともに、相互の「自愛心」を不可欠な契機とすることを指摘した。「人は仲間の助力をほとんどつねに必要としており、しかも彼らの慈悲心だけから期待しても無駄である。自分の有利になるように彼らの自愛心に働きかけ、自分が彼らに求めることを自分のためにしてくれることが、彼らの利益になるということを、彼らに示すことのほうが、有効であろう」¹²⁾と述べた。こうした人間の本性と分業とはどう関連するのか。分業が教育の結果であるとは、スミスは論じてはいない。分業は人間のなかの交換性向に基づき「各人の仕事のある一つの単純な仕事な作業に縮小し、またこの作業を彼の一生のただ一つの仕事とすることによって、必然的に職人の腕前を大いに向上させる」とかれは捉えた¹³⁾。

iii) 労働の「抽象化」

マルクスは「共同体内部の分業」について、「労働者が仕事に適合させられるべきで、仕事が労働者に適合せられてはならない」というプラトン『国家』の見地を説明し、すべての労働者の一定の食事時間を確定する工場法の条項に対する漂白工場主の抗議の中にも、このプラトンと同一の観念は見出されると指摘した¹⁴⁾。こうした分業（社会内分業・工場内分業）は、資本の蓄積を促進するための手段としてのみ展開し、その生産機構で労働者は「多数の個別的部分労働者」としてのみ編成される。このとき労働は、労働者にとって-中世の同職的組合の手工業者（『ドイツ・イデオロギー』）とは異なって-「疎外された労働」となる。機械装置が導入されれば、「一つの部分機械に仕えることを終生の専門とすることになる」¹⁵⁾。こうした分業によって、個々人の労働はますます「抽象化」してゆくとマルクス（『経済学・哲学草稿』）は-ヘーゲル『法哲学』をうけ継ぎ-捉えた。労働の「抽象化」は、マルクスの場合「物象化」として批判的に把握されていた。

2) 先行するヴェーバーの教育認識

i) 「ゼクテ」の人間形成論理

アメリカを体験(1904年秋)してヴェーバーは、自発的参加集団「結社」としてのゼクテの働きに着目した。ゼクテは、集団概念として教会と対比される。教会の場合、個人の「生まれついた」(Nr. 25, S. 578) 帰属性を決定的標識として制定秩序が強いられるが、ゼクテは成員に「団体形成能力」という条件を不可欠に要請し、「『教育学的な』働き」(Nr. 24, S. 562)を示す。ゼクテに属そうとする諸個人は、帰属の適格性をその集団にふさわしい行為を通じ「実証」しなければならない。そうした「生における実証(Bewährung)」は、行為主体に即せば自己自身を対象とする意図的な人間形成を意味する。この実証性は、クウェーカーの場合「細心に検討した自己自身の良心の声による行動」として徹底された。それをかれは「個人の自律性(Autonomie)」(Nr. 25, S. 579)として把握した。こうした「実証」は、同時に団体形成能力によって共同的な社会関係、とりわけ職業社会を構成し、「広範な大衆を、しかもとりわけ近代労働者を激しい宗教的関心で満たすことができた。…この点でゼクテの意味は宗教の領域を大きく越え」、「アメリカのデモクラシーにその独特の弾力的な構成と個人主義的色彩を与えた」(Nr. 25, S. 580)。クウェーカーの場合、「福音がいまだ伝えられない人々にも」「内なる光」(Nr. 25, S. 579)が伝えられるという思想となったとかれは特記した。民主主義を基礎づけるゼクテは、同時に所属する個人の存在の証明の「純粋さ」が生命になる点で、制度による認証でなく、理念との紐帯を意識するという基本姿勢が重視される。その点で、“地位”ではなく、「資質」のアリстокラシー」を形成した、とヴェーバーは捉えた。

ii) 労働課題の「分化」をめぐる教育の問い

工場労働調査論(1908-9)でヴェーバーは20世紀初頭、機械化が進行する工場内労働について調査分析した。本稿で重要なのは、労働課題の「分化」と労働者の「主体的態度」(Erhebungen, S. 141)の関連性の問いである。「分化」は工場内分業と人間形成にかかわる基本的視点二つをいっそう先鋭に提起している。一つは、「個々の労働者の工場内での有用性は、ますます専門化的に、特殊な適性がえられように、練習を通じて細分化されるのか、それとも汎用的に形成されるか」(Ebd., S. 95)という工場内の諸課題が要求する作業能力いかにを検討する方向(Ebd., S. 90)、もう一つは、「神に喜ばれる」といった「世界観的な」生活態度など「職業外の『生活様式』」(Ebd., S. 143)にかかわる労働者の「個人的偏差」のうち、なにが勤労態度を形成し、労

働能率に影響を与えるか、という形で人格的資質から作業達成いかんを検討する方向である。この問いも含めて、労働問題は—自然科学的に（精神物理学的次元でも）検討できるが—、「職業生活」にかかわり、「商業政策上」のみならず、「『文化政策的』（学校政策的にも）」（Ebd., S.81）に重要な普遍的な問題であると、マックス・ヴェーバーは概括した。工場内労働の分化にともない、諸個人と職業との“適合的”対応の関連性を問いかけていた¹⁶⁾。

『倫理』論文で記述される教育に関するヴェーバーの認識をわれわれが位置づける場合、以上の先行認識との関連を重視したい。

3. 『倫理』論文における教育認識の展開

— 互酬的交換の理念的抽象化と分業主体の形成 —

1) 教育社会史的記述の展開

『倫理』論文中的教育といえば、職業系中等教育諸学校在籍者の信仰種別の比率と、総人口におけるその比率との関連などの例が、第1章問題提起の冒頭（RS I, S.21）で印象づけられる。その例とともに—近代初頭（17-18世紀）禁欲的プロテスタンティズムの教育以外に—断片的だが、全2章の本文中に連続・非連続性が留意されて教育の史的系列が記述されている。第一は古代イスラエルで、捕囚からの帰還後、旧約聖書成立後の形式主義的、律法的・タルムードの「教育」（Ebd., S.181）、第二は中世の「教会訓練」（Ebd., S.161）、修道院での禁欲生活（Ebd., S.118）、第三には、個人（企業家・労働者）が資本主義の経済秩序の「外枠」にはめ込まれ、経済的「淘汰」が進行する現代の「教育」（Ebd., S.37）である。「教育」に焦点づければ、一種の教育社会史的記述が展開しているといえる。そのなかで禁欲的プロテスタンティズムに関しては、どのような「教育」のあり方が記述されるか、かれの教育認識を以下に構成しよう。

2) 近代教育認識の形成

i) 前史的な職業観

—「義務遂行」としての性格づけ—

『倫理』論文第1章でルター（1483-1546）は、前史的に神秘主義者として位置づけられる（Ebd., S.68,78）。「非合理的要素」（Ebd., S.62）を経由しながら、中世の「スコラの根柢づけ」（Ebd., S.71）の試み（信仰の知解）からどう離反し、他方で「経験的所与の領域」で現実感覚を獲得し、どう「合理的な生活態度」に役だったか（Ebd., S.107-108）という点に、哲学史記述（ヴィンデルバンド）に拠ってヴェーバーは関心をむけ、ルターの「職業」観に着目する。

まずドイツ語による聖書訳業にヴェーバーはふれ「Berufの語がまったく今日の、純粹に世俗的な意味で用いられた最初の場合である」と指摘した。その論拠の妥当性をめぐる研究上の所見¹⁷⁾があるが、世俗内職業労働を肯定的に認め、各人に「割り当てられた職業」（Ebd., S.66）にとどまることを求めるものとして、かれはルター主義を捉えた点が重要である。世俗内の職業労働がたんに許されるのではなく、聖書の真理によって「命令」され、無条件的で、それ自体を目的とする「義務の遂行」として成立しているとかれは—旧約ベン・シラの翻訳文献を手がかりに—性格づけた。自発的な選択余地のある責務ではない。「世俗的職業の内部における義務の履行」を財産や富の生産性の源泉として価値づけるのではなく、「道徳的実践生活の最高の内容」として重視した。この一事こそ、その当然の結果として、世俗的日常労働に宗教的意味を認める思想を生み、この意味での天職の観念を最初に生み出した」（Ebd., S.69）。

そのような義務履行に対するルターの評価は、「どんな環境でも神に喜ばれる」のはこの義務履行として、「すべての職業は神の前に同一の価値をもつ」(Ebd., S.71)とし、分業する「世俗の職業労働を隣人愛の外的現れと考えた」。労働評価に上下の「階梯」(Ebd., S.71)を付与する中世の「スコラの根拠づけ」ではなく、その根拠づけを断ち切った神秘主義的な立場によって近代へと一歩をすすめた、ヴェーバーは位置づけた。しかしその一方、醸造、製麵等の社会内分業は相互の「自愛心」に基づく「交換」として、分業を称賛するスミスと対比することによって、ルターを限界づけた。

こうしたルター主義から「教育」は要請されるのか。ヴェーバーを離れて教育史研究でルターに教育思想を検出することは決して困難ではない¹⁸⁾。しかし『倫理』論文でヴェーバーはルターに教育観念を見出していない。「ルターはますます各人の環境として与えられる歴史的・客観的秩序が、直接に神の意志に基づくものと考えるに及んで、人間生活の個々の現象のうちに神の摂理を強調し、「各人は原則として神のいったん授け給う職業と身分のうちにとどまるべきである」とし、「神への無条件的服従と、所与の環境への無条件的適応とを同一視する」(Ebd., S.76-77)とした。そうした指摘は、「人間の制度 (Menschen-Satzung)」(Ebd., S.75)の所産としての社会の成り立ちを、ルターは認識してない、というヴェーバーの根本的な問題把握と結びついている。この点にかかわり、意図して人間を形成する働きとしての教育を、このルター主義は要請しないものとしてかれは捉えている。「倫理の領域における新しい立場の発展を阻止」(Ebd., S.77)し、禁欲的な行為を通じての「自己訓練 (Selbstdisziplinierung)」(Ebd., S.79)を疎んじ、そして「実証の思想を成長させる起動力が欠けていた」(Ebd., S.126)とかれは限界づけていた。

ii) 「選び」の教説

- 超越的理念の「道具」としての不断の職業労働 -

「職業」観の系譜で前史的に位置づけたルター主義を批判的に受け継ぐ形で、カルヴィニズムが、『倫理』論文第2章第1節では中心的に記述される。カルヴィン(1509-1564)の個人的見解ではなく、オランダ、イギリスなど「資本主義の最高度に達した文化諸国」で17-18世紀に展開したものである。その影響の中心となった「選びの教説」(Ebd., S.89)のうち、権威ある典拠としてヴェーバーが着目するのが1647年「ウェストミンスター信仰告白」である。それから導かれる「教説」には、ルター主義とは異なった思想的契機によって「教育」が要請されている。宗教的信仰と実践のなかから生まれ、各人の生活態度を方向づける心理的な「起動力」(Ebd., S.86)に対するかれの関心に即し、その思想の構造を以下(a~d)に分析しておこう。

a. 諸個人の「孤立」性の認識

ルター主義では新約聖書の神を主位とし、靈魂と神の交わりを至上としたのに対し、カルヴィニズムでは、神は旧約の神ヤハヴェであることが強調され、諸個人に対して「超越的な存在」として認識することが求められた(Ebd., S.92-93)。人間はその神の栄光のために存在する「手段」(Ebd., S.92)として性格づけられた。「かかる荘厳な非人間性をもつ教説」は、「各個人の内面的な孤立化」をもたらした。「誰人もかれを助けることはできない」(Ebd., S.93-94)。聖典礼も、教会も役に立たない、こうした事態は、消極的には「呪術から解放」する古代ユダヤ教以来の過程がここで完結した(Ebd., S.94)と特徴づけられる。その人間のあり方を前提としてうけとめ、より積極的には、どのような人間の可能性を示したか。

b. 「道具」としての行為主体の意義づけ

各人は孤立を感じつつ、超越的存在としての神を意識し、「私は選ばれているのか、私はどうしてこの選び(Erwählung)を確信できるだろうか」という問いにむき合った。その応答は、「魂への配慮」(Ebd., S. 104) の実践が担った。「自己が救われていることを確信しうる方法としては、かれ自身が神の力の容器と感ずるか、あるいはその道具と感ずるか」である。「第一の場合のはかれの宗教生活は神秘主義的な情感生活に傾き、第二の場合には禁欲的行為に傾く」(Ebd., S. 108)。ルター主義は第一の類型に接近し、カルヴィニズムは第二の類型に属する。「神の容器」ではなく、「道具」として働く存在として自己を規定するとは、各人は、神性を「所有」という自己の聖なる状態性を確認するのではない。そうではなく、「道具感情」(Ebd., 141) とともに「積極的な行為」が要請される。人間の主体的な行為を通じて、超越する理念を実現しなければならない (Ebd., S. 104-105)。そのために具体的にどのようにするか。

c. 「思想の力」による自律的な行為主体の形成

「被造物の神化と個人的な対人関係への執着とをはげしく排斥した態度のために、この活力はおのずから即物的(非個人的な)活動にむかわざるをえなかった」(Ebd., S. 99)。この「即物的な活動」とは、具体的には—商品としての労働ではなく—使命として打ち込むことのできる「不断の職業労働」(Ebd., S. 105) を指す。これに目的それ自体として取り組む姿勢は、逆説的に響くが、「道具」として自己のあり方を純化することになる。その実践主体は人間形成可能な目標になるのだろうか。「論理的にはたしかに、予定説の帰結として宿命論を引き出すことができよう。だが、その心理的作用は、『実証』思想の介入によって正反対なものになった」(Ebd., S. 111)。「自己確信を獲得するために…不断の職業労働」が「自分の良心の声によって命ぜられた」(Ebd., S. 105-106) とうけとめた。諸個人の「思想の力」(Ebd., S. 112) が発動し、行動を不断に検証することを促す自己形成が導かれる。このとき職業労働はプラグマティズムの原理で意義づけられる¹⁹⁾。こうした実践的な「起動力」(Ebd., S. 126) は、選択判断する主体的作為によって生ずる。「カルヴィニストはみずから自分の救いを—正確には救済の確実性をといわねばならないが—作り出す」。そして、「どんな瞬間でも『選ばれているか捨てられているか』との選択のまえに組織的な自己統制によってである」(Ebd., S. 111)。ここにいう「自己統制」(「自己支配」)とは、世俗内職業を使命として遂行できるよう、目的—手段の関係を思考する合理的な生活態度を確立する自己教育を意味する。その場合に、自己自身が機械的自動的ではなく、また神性を所有し神秘的に被造物神化にならないよう、「禁欲」(Ebd., S. 116) をもって抑制的計画的に熟慮することが重要な方法となる。こうした自律的な自己形成によって、個人の道徳的な善き生を実現する。ヴェーバーはそのようにカルヴィニズムを捉えた。

d. 分業労働を通じての互酬性理念の実践

職業を通じて自己自身にむきあい自己教育を重んずるカルヴィニズムは、同時に、他者と結合する行為を不可欠とした。たしかに「現世に張り巡らした紐帯から個人を内的に分離させようとする傾向とが、いかに結合されえたか」は「謎」に見える。しかし、「内的孤立化の圧力のもと、『隣人愛』が導かれた」(Ebd., S. 98-99)。そして分業する職業労働が重んじられた。隣人愛による分業の肯定はルター主義にも見られたが、カルヴィニズムによる肯定の仕方は、決定的にルター主義と異なることをヴェーバーは明らかにする。「『隣人愛』は、—被造物ではなく、神の栄光への奉仕でなければならないから—まず第一に自然法によって与えられる職業義務の履行のうちに現れるものであり、この場合、それはとくに即物的で没人格的な性質—われわれ

の周囲の社会的秩序の合理的構成に役立つべきものとして-を帯びたものとなる。…それが人類の『効用』のために備えられていることは明瞭であるから、この没人格的で、社会的効用に奉仕すべき労働は神の栄光を増し、その意志にかなうと考えられた」(Ebd., S.100-101)。社会的秩序の構成という場合、人間の「道具感情」に根ざした作為の所産として「社会」が構成される、という成り立ちを意味する。職業分化した社会的分業は「効用」に貢献する、という点で「社会」を合理的に構成するものとしてうけとめられた、とヴェーバーは理解した。こうした「社会的労働」としての分業は、どのような人間行為を要請するか。奴隷民の「不自由労働」(ヴェーバー「古代文化没落の社会的諸原因」)ではない。むしろ、律法(Gesetz)の命ずる義務履行としての意味がある。その点で、ピューリタニズムがカントと親縁的であったことも、かれは理解している(Ebd., S.182)。こうした分業は「神の栄光への奉仕」という形で、当為を指示する理念の実現を求める。この点で没人格的である。したがって、この没人格性は否定的意味では把握されていない。こうした没人格性は、積極的には、理念志向とともに、それを具現する専門的職業課題そのものに対し目的合理的である姿勢を強調する。その帰結として「功利主義」が導かれることをヴェーバーは指摘する(Ebd., S.174)。ゆえにこの功利主義は禁欲とは矛盾しない。それにしても、この労働が没人格的とは、実践的動機の点で疎遠にならないか。かれは注記する。「神は-清教徒の文献にしばしば強調されているように-己以上に隣人を愛せよとは決して命令したまわず、己のごとく隣人を愛せよと命じ給うたからである。それゆえ自己愛もまたわれわれの義務である」(Ebd., S.175)。隣人愛としての分業の基礎には、自愛心に根ざした互酬の交換を原理とする認識がある。この点で、アダム・スミスとの違いに注意したい。人間本性としてこの「自愛心」を把握し、「交換性向」と相まって社会的分業を基礎づけるスミスに対し、ヴェーバーは-民衆の原生的倫理として「頼み手伝い」という自然的素地をかれ自身認めるが-「義務」として認識されていると把握した。

以上のようにルター主義からカルヴィニズムにいたる歴史記述を辿ると、思想的側面(「職業観」)を含む教育社会史的関心のうちに、史的発展の相をかれが見出していたことがわかる。それは「近代的」と特徴づけられよう。世俗内職業労働を肯定し、世俗化を進めた点は、その基本的意味に沿う。それ以上に特記すべきは、職業観を基礎づける人間観の特質が問われていることである。自己が何であるか、という自己の人間性が所有する状態性ではなく、自己が何でなければならないか、という問いかけとともに、自己が何をするかという行為が求められている。その場合、自己自身は「道具」的存在として主体的に働く、という自覚(「道具感情」)が、根本的な重要性をもっている。しかもそれは習得されるべき自覚であって、生来的に具備する資質ではない。そのような人間観から導かれる、自己自身を形成する主体的行為と、分業という主体的行為を通じての社会的結合の重要性の認識を、かれは史的系列に見出している。この点で、原理的な意味での近代性を、われわれはその系列のなかの教育思想に認めることができる。そうした近代性に立脚して、個人の道徳的な善き生は、義務履行として特徴づけられる分業労働という主体的行為によって実現され、同時に、「隣人愛」に価値関係づけられる。

『倫理』論文第2章第1節の後半部には、以上のカルヴィニズムと並んで第二のゼクテとしてクウェーカーが記述されている。「理性と良心による内面的証明」こそ究極権威とし、「脱呪術」を徹底したとヴェーバーは位置づけた。「内なる光」の教説に導かれて、「道具感情」ではなく、「聖霊を待望」した。聖書によって啓示を知らない人々もこれに与りうると、かれは記す。待望するのであって、神の「容器」となることではない。神との隔絶(Gottferne)の意識が

あったことをかれは断っている (Ebd., S.157)。この立場—「寛容」思想の一源泉と特徴づけられる (Ebd., S.131)—からも自己統制とともに、世俗的禁欲に基づく職業的労働が方向づけられた (Ebd., S.155-158)。プロテスタンティズムのうちに、カルヴィニズムとは異なった一つの思想的可能性をかれは把握していたこと、その点をわれわれは留意しておきたい。

3) バクスター「魂への配慮」説の展開

—「共通善」としての理念的抽象化—

倫理的慣習のうちに以上の思想を展開したカルヴィニズムは17世紀イギリス清教主義に展開し、労働をめぐる現実の困難（貧困、労働嫌悪、怠惰、奢侈等）に直面しながら職業観念を徹底していたことを、ヴェーバーは第2章第2節で論証している。「魂への配慮 (Seelsorge)」（Ebd., S.164）の実際の経験をふまえた、その代表的な理論家としてR.バクスター（1615-1691）の所論が位置づけられている。

バクスターの言葉を引き、ヴェーバーはいう。その主著には不断の熱心な肉体的あるいは精神的労働のすすめが一貫して説かれている。ここには動機二つが絡み合っている。「第一に労働は古くから試験済みの禁欲的手段ある」。この点にかれは注記する。「職業労働は隣人への愛の奉仕であり、神の恩寵に対する感謝の義務である（これはルターの観念である！）」。「第二に、労働は「神から命ぜられた生活一般の自己目的であり、『働かざるものは食うべからず』とのパウロの命題は、万人に妥当する」と捉えたバクスターの考えも、世俗内労働は命ぜられた義務の遂行であったと、ヴェーバーは指摘した (Ebd., S.171)。命ずるのは、旧約の律法である。「個人の選び」という予定説をバクスターもまた手放してはいない (Ebd., S.164)。「行為によって、神はもっとも賛美され、仕えられる」 (Ebd., S.168) といったかれの言葉を引き、「無為や享楽」ではなく、職業労働による諸個人それぞれの「実証」が重んじられているとヴェーバーは認識する。

こうした職業の指導は、分業労働を積極的に肯定し、「共通善 (the common good) に仕える」 (Ebd., S.168) という理念として抽象化する方向に道を開いた。ヴェーバーはいう、「バクスターの説明には、アダム・スミスの有名な分業賛美論を想起させる点がすくなくない。職業の専門化は労働者の熟練(スキル)を可能にする結果、労働能力の量的・質的向上をもたらし、かくして一般の福祉(共通善) —それはできるかぎりの多数者の福祉というのと同様である— に貢献する」 (Ebd., S.173)。バクスターは、専門分化した分業労働そのものに取り組むこと、とりわけ「組織的・方法的性質」で取り組むことを説いたとする。そうした主張と関連して、分業が自然的所与のものではなく、職業の選択、「変更」 (Ebd., S.175) も積極的に肯定される社会的分業として特徴づけられることを、ヴェーバーは確認する。「共通善」に社会的分業が奉仕するということは、「被造物神化の否定からうまれる」 (Ebd., S.99)。被造物ではなく、職業義務の遂行を通じて、抽象化された理念に献身することが主眼になる。この志向から、「非人間的」とも思われる光景も倫理的に正当化される。「アムステルダムの孤児は、20世紀となっても黒と赤、あるいは赤と緑の左右に分かれた上着とズボン—道化師の装束の一種—を着用させられ、隊を組んで教会へ連れられたが、これは従来の意識にとっては真に建徳的な光景とされたもので、むしろ人格的『人間的』意識の上から侮辱と感じられるだけ、それだけ『神の栄光』を増すものであった」 (Ebd., S.101)。「公の利益」「多数者の利益」は、共通善とも説明される。それは、無数の人々の職業によって担われる。この点をかれは記す、「バクスターが、当時の『ブルジョアジー』の立場に立っていたわけではないことを知るにはかれの場合にも、神の良しとされる

職業の序列では有識者の職業の後に、まず農夫が、その次にはじめて海員、織元、書籍商、仕立屋などがまことに雑然とあげられていることを思い浮かべば十分であろう」(Ebd., S.192)。個々の職業がそれぞれに「共通善」の一端を担う形で分業労働が展開する。

こうした志向とは別に、行為の現実結果にかかわって、分業の結果、「財の分配の不平等」(Ebd., S.199)の現実ヴェーバーが注意をむけていたことも、見逃してはならない。「低賃金に拘泥しない忠実な労働」(Ebd., S.200)の思想を示す関係著作に言及し、その補注でかれの関心は、資本主義的経済秩序に親和的であると同時に、それとは対照的な倫理的行為の可能性にむけられている。バクスターがある町を訪ねたとき、この町は荒廃し「ここでのかれの伝道の成功は、魂への配慮の歴史上その比を見ないものであったが、それは同時に、禁欲主義がいかにして民衆に労働をマルクスのいえば、余剰価値を教育し、かれらがそれによつてはじめて資本主義的労働関係(家内工業、織物業)に使用されえたことを示す、模範的な例である。…バクスターから見れば、自分の弟子達を資本主義の営みの中に押し込んで、自分の宗教的・倫理的関心に奉仕させた。資本主義の発展の側から見れば、後者が資本主義的『精神』の発展に奉仕した」(Ebd., S.200)。ヴェーバーの複眼的な認識関心は、「魂への配慮」にかかわる労働行為にむけられている。その場合、資本主義的労働関係に対しその合理的な行為がいかに「推進力」として働いたか、という因果関係ではなく、むしろ両者の対照性であった。

4. 『古代ユダヤ教』での原初状態との関連

－自己教育思想としての「選び」の構造－

以上の禁欲的プロテスタンティズム諸派、とりわけカルヴィニズムの「職業義務」の思想に達するその教育社会史に関するヴェーバーの記述を、同時期の『古代ユダヤ教』と関連づけよう。その内容は一種の原初状態である。なにかしらの憶測的起源や仮説設定された状態が記されているのではない。捕囚から帰還後、紀元前5世紀中葉の教団成立(エズラ、ネヘミヤ体制)を境にその前後を区別する社会史が、錯綜した史実とともに実証的に記述されている。神の選民という説の大規模な「復活」であるとするかれの認識関心(Ebd., S.182,204)に即し、原初状態にかかわる二つの時期(教団成立の前と後)に留意して、参照基準を示す事例として把握したい。その比較を通じて、『倫理』論文の社会史的記述のなかで、どのような思想－教育思想として特徴づけることが可能な思想－をヴェーバーは把握していたか、ここで解明しよう。

1) 「選び」の説について

－仮説的確信に基づく人間形成－

原初状態(教団成立前)とカルヴィニズムも、選ばれたという所与ではなく、選ばれるという行為動作が求められることが中核的に重要である。両者は次の2点で類似する。第一に、一方が『「悲惨の炉のなかで」選び抜かれた』人間にならねばならないという人間形成の当為論理が導かれたように、カルヴィニズムでも、理想とされる人間になるよう行為をもって「実証する」努力を要請し、人間形成の必要性が積極的に導かれた。第二に、その人間形成において、超越者に対する「謙抑」とともに、超越的理念に対する志向が重要な契機となった。こうした類似性が認められるが、両者は2点で決定的に異なる。一つは選ばれる主体について。一方は、連帯性(結社性とアンシュタルト性の両契機)の絆が期待される「兄弟分関係」のわれわれであったのに対し、他方は「孤立」を経験している「私」であること。もう一つは、選ばれると

いう課題設定について。一方は、選ばれたという先行出来事があったが、同時に、選ばれるに値する人間になることが当為規範として明示的に—イザヤ書が記すように、「『悲慘の炉のなかで』ヤハウェはその民をかれの『選び抜かれた民』にする」(Das antike Judentum, S. 739)と—課題として共通使命とされた。他方カルヴィニズムでは、すでに私は選ばれたか、選ばれていないかは「宿命論」的な既定事項であり、したがって明示的な外的当為規範として人間形成は課題としては設定されてはいないが、それにもかかわらず、選ばれたかのようにという仮説的確信を指す「思想の力」によって、みずから内面的に指令する課題として諸個人それぞれの人間形成が導かれた。

2) 互酬的交換を通じての共助について

—抽象的な理念形式による社会関係の形成—

上記の「選び」において、超越者にむけた縦の関係とともに、横の関係でも、共通基盤を有している。隣人愛とはいえ、自愛心に根ざし、互酬的交換を通じての共助の共同体行為を重んじている。しかし明白な違いが見出される。ヴェーバーによれば、古代の原初状態(教団成立の前)ではイスラエルの民同士の歴史を共有し、共同の負荷を引きうけようとする「兄弟分関係」の連帯性の絆が求められていた。カルヴィニズムでは、教会との絆を退け、「孤立」を経験している諸個人を前提とした。カントのいう非社会的傾向性として特徴づけられる。そのような諸個人が、もっぱら結社的な自発的動機で、「信徒は聖書に録されている選ばれた人々、例えば族長と、自己の魂の状態を比較することによって」(Ebd., S. 110)、それぞれが選ばれるに値する、理念的に超越する契機をもった人間類型を基準として選び—この点で資本主義的経済組織での「淘汰」と区別され—主体形成することが重視された。このように結社性を基盤に、「隣人愛」は没人格的理念を示す「共通善」として抽象化して押しあげられた。マルクスのいう「物象化」を肯定的な側面で把握している。互酬的交換としての共助の行為を示す、相互依存関係という人格的絆は、「残株の落ち穂は畑に残して」という具体的な原初状態を想起させながらも、抽象的な理念形式を通じて、一般性の次元で広範囲に人々の社会関係を形成することを可能にする。

3) 「魂への配慮」について

—精神のアリストクラシーを導く自律的な人間形成—

この相互依存関係において、諸個人は自己自身に対しどうむき合うか。原初状態(ただし教団成立の前)のように、カルヴィニズムでも「魂への配慮」が重視されていた。しかし、後者では倫理の抽象化にかかわり2点で異なっている。第一にその担い手について。前者では祭司・預言者・平信徒知識人といった諸社会層を教育主体(教える側)とする教育共同体による他者教育²⁰⁾であったのに対し、後者では平信徒が自己自身に対する自己教育の習慣態度として成り立っている。第二に「魂への配慮」の意味について。前者では「苦難」を通じて「選ばれた民」にすることを「魂への配慮」の本質としたのに対し、後者では「苦難」ではなく、原初状態(ただし教団成立後)における「律法遵守」(Ebd., S. 182)との連続性の強調とともに、「形式的合法性」を基調とする「禁欲」の自己統制における合理的熟慮を「魂への配慮」とした。その場合、カルヴィニズムでは—原初状態(ただし教団成立後)とは異なって—「積極的な行為への強い動機」(Ebd., S. 182)を含む「禁欲」が、個人において「厳格に実践されればされるほど、その発展にともなつてつねに聖徒の宗教的貴族主義を生じ」(Ebd., S. 134)た。分業労働に励みながらも、超越的理念との紐帯をめざす資質のアリストクラシーを可能にする自律性の精神態度を導いた。

5. ヴェーバー社会的分業の教育認識の史的意義 － 互酬的交換を理念とする倫理共同体とその構成主体の形成－

ここにいたって、『倫理』論文における社会的分業の教育（認識）に関するヴェーバーの認識－とりわけカルヴィニズムの「『職業義務』の思想」が示した社会的分業の教育認識に関するヴェーバーの認識－が、同時代どのような史的意義を示していたか究明していこう。

禁欲的に世俗内の職業労働に励むことは、個人の道徳的な善き生を実現する「義務」として規定される。と同時に、職業分化した「社会的分業」としても重んじられ、各人は分業を通じ互酬的交換を原則とする「共通善」にかかわると、理念的正当化された。こうした系列をかれは跡づけ、「孤立」を経験する諸個人にとり、分業を通じての協働的労働によってこそ、自律性を確保しながら相互依存を実現し、倫理的共同体を構築することを明らかにしたのだった。

その協働する行為主体は－ヴェーバーの対象の認識によれば－けっして自然的に成立するのではない。その主体を意図的に形成する「自己統制」という努力を不可欠としていた。その内容構造をまずここで整理しておこう。消極的には、人間性の現実的所与として内包する二つの困難の克服を課題とする。一つは、諸個人が徹底した「孤立化」を経験していることで、「非社会的傾向性」（カント）といえる。もう一つは、同じ諸個人が「禁欲」の生活態度とは反対の諸傾向、すなわち、「多面的人間性」（Ebd., S. 203）を求めたり、富の「誘惑」（Ebd., S. 195）に陥ることである。こうした困難を克服する「自己統制」は、より積極的には、相互依存関係をささえる諸個人の「自律性」を必須とする。それは結社集団の構成主体とし“資質”のアリстокラシーを形成する、理念的超越性の志向である。「隣人愛」理念がそれに相当する。その点で、資本主義的経済組織の秩序に「類縁関係」（Ebd., S. 26）をもった現世適応的行為の方向とは異なる、現世超越的な行為が指示されていた。ただし、「決定的に重要な点は、たんに資本蓄積だけではなく、職業生活全体の禁欲的合理化にあった」（Ebd., S. 193）というかれの所見を重視するなら、経済的側面を倫理的共同体の全体はその一部分として内蔵する。『倫理』論文は、経済的行為主体に対して倫理的な協働関係を優位にして前者を組み入れた社会教育領域にかかわる主体形成認識を示していた。その限りで分業は、たんなる部分労働として断片化はしない。こうした倫理優位の事情をより精密に把握するためには、当の論文が同時代に示した意義²¹⁾を考察しなければならない。

同時代、等しく「即物性」（Sachlichkeit）に人間形成原理を認めて、Arbeit－「作業」と訳される－を重視したケルシェンシュタイナー（Georg Kerschensteiner, 1854-1932）をはじめに想起したい。両者には、重要な違いがある。第一に、一方が学校の活動様式であるのに対し、ヴェーバーがとりあげた対象の場合には職業社会における行動様式であったこと。第二に、目的・方法の熟慮が、一方が作品の「完成」をめざした作業の契機が重視されたのに対し、ヴェーバーがとりあげた対象の場合、「完成」（「完成体験」）ということは熟慮の対象にされず、不断の「禁欲」を通じての生活態度に対する合理的な統制にむけられていた。第三に、一方が所与としての現実の国家に積極的に貢献する「有用な公民」たることが目標とされたのに対し、ヴェーバーの対象に見出したのは、公共性をもちつつも、理念的に抽象化された「共通善」の一端を実現する「道具」となって、その社会を構成する主体の形成がめざされていた。とりわけこの第三の点を以下掘り下げよう。

『倫理』論文でトレルチの論説が参照されている²²⁾。教会、ゼクテ、神秘主義の3類型を区別して、ルター、カルヴァンの系列をゼクテと基本的に特徴づけ、「所有とその増大の追求へのこのような承認は、労働を禁欲的訓育の一手段として把握し、富むことを公共の福祉のために神の命じた義務として捉えるカルヴィニズムの教義によって倫理的正当化された」と、トレルチは指摘した。ヴェーバーの認識と基本的に共通する。しかしこのトレルチの所見をさらに吟味すると、ヴェーバーはかれと異なる。「禁欲」が「苦難に耐える」という意味でトレルチが旧約と関連づけるのに対し、ヴェーバーの場合には、旧約（捕囚からの帰還後）に依拠しながら「形式的合法性」の方に根拠づけた。それによって、プロテスタンティズム諸派の労働が「合理的・市民的な経営」（Ebd., S.181）の性格をもったことが強調された。その際、「ヨブ記」は『古代ユダヤ教』では、「苦難に耐える」という思想を具体的人物像として顕著に示す資料として位置づけられていたが「禁欲」の前提となる此岸の生活を肯定する根拠づけとして重んじられたという事例で、『倫理』論文でかれは着目した（Ebd., S.180）。

こうしたヴェーバーの禁欲観は、相互依存の人格的直接性に自然的素地があることを認めつつも、むしろその行為を抽象化し、客観的制度化の方向で社会的分業として把握したことに関連する。この点でデュルケム『社会分業論』が対比できる。次の2点で両者は類似する。一つは、デュルケムが道徳的無規制状態（アノミー）を問題にし、ヴェーバーが、「内面的孤立」を経験する諸個人を前提にし、いずれにしても、諸個人の「非社会的傾向性」（カント）の側面を前提にしていること。もう一つは分業の人間形成機能について。デュルケムは、分業が機械的役割に諸個人の人格を陥れる可能性を認識（「機械的連帯」）するも、スミスと同様に分業を通じて能力開発する機能を強調した。カルヴィニズムに対するヴェーバーの分業認識でも、分業による職業の専門化が「労働者の熟練を可能にする」（Ebd., S.173）と着目し、人間形成の肯定的な働きを重んじた。こうした類似性を有しながら、重要な違いがある。デュルケムは、分業は「自発的であるかぎりにおいてのみ連帯を生」み、「社会的連帯」の源泉であると強調し、諸個人が分業によって、「自己の社会への依存状態」を意識し、「道徳的秩序の基礎」ともなると論じた²³⁾。そして道徳的行為規則を示す同業者組合の意義を強調した。しかしどのような道徳的価値を実現するかについては抑制的で重点的には論じなかった。他方ヴェーバーの場合、Berufの観念にかかわる歴史記述によって、分業労働する行為者の倫理的な価値志向が中心関心をもって追跡されていた。そして、個人の義務履行を通じて善き生にかかわり、「隣人愛」「共通善」の一端をめざしていたことが指摘されていた。カントのいう「公共体」を形成するという課題に位置づけられるだろう。しかし— 補足していえば— ヴェーバーがとりあげた対象では、結社的に理念追求する事例であっても、その一方、アンシュタルト性を含む「連帯性」の契機は、見出されてはいない。

カルヴィニズムにおいて「隣人愛」の没入人格性が強調され、抽象化された労働が積極的に価値づけられたことは、社会圏の拡大とともにどう諸個人が人間形成していくか、という基本的問いに関係する。この点でジンメル『社会分化論』（1890）が参照できる²⁴⁾。2点ふれよう。第一に、抽象化の没入人格性の側面である。「究極の目的がいかに個人的であるにしても、手段においては、われわれをわれわれ自身から遠ざけなければならない。必要に迫られて客観的な関係を熟知すること、それらの関係に対する関心を引き起こし、自分のためという究極目的のために行われる他人あるいは他事への献身が、よく没我的な献身に達する場合、…究極の目的への回り道はしばしば倫理的である」。とくに経済的関係の場合はそうである、とジンメルは指摘

していた (Simmel, S.42)。ヴェーバーが見出した「禁欲的労働」は、人格的直接的から「倫理的なもの」への「回り道」の契機を含み、倫理的共同体を構成していた。第二に、分業にともなう社会集団の分化と個人の分化との適合性の問題について。「社会集団の分化は、個人ができるだけ一面的になることを意味する。…全体が要求する鋭く区別された諸内容の多様性は、個人がまさにその多様性を断念することによって、実現可能になる」(Ebd., S.138)。しかし、この対立は絶対的ではない。「分化の衝動は無限にすすむものではなく、…社会的および個人的課題を、この両者にとって同じ程度の分化が必要とされるように形成していくのが、つねに文化の課題である」(Ebd., S.139)。ヴェーバーが見出した分業する行為主体の形成の事例は、職業観と職業的生活態度を視野に入れながら、分化間の相互作用上の「葛藤」をめぐり調整する、ジンメルという「文化の課題」を－主観的意図は別として－事実として受け継いでいた。すなわち、カルヴィニズムの「選び」の説では、次のような両面の課題に込めている。一方では、各人がみずから選んだ職業の労働をもって「実証」しつつ、どう「個人の分化」に込めるか、という課題が自覚される。「自己の技能と創意を通じての個人主義的な起動力」(RS I, S.201)が尊ばれた。同時に他方では、多様に職業分化し、専門的な一面性を要求する職業課題にも「義務」として没我的に専心し、どう「社会の分化」にも込めるか、という課題が自覚される。こうした継受が認められる。しかし重要な違いもあった。ジンメルは行為者の志向よりも、それを含む行為の「相互作用」とその形式に着目する (Simmel, S.16)。ヴェーバーは行為主体の志向と実際の行為とその結果－「隣人愛」という志向と「分業的職業労働」という行為と資本主義の「精神」など－に着目している。行為主体の志向性と職業課題とにかかわる両極をふまえ“適合的な”人間形成課題が、社会的分業を通じての社会教育領域に設定される。ヴェーバーの自身の認識関心に即せば、工場労働調査論で示した「文化政策的」関心に通ずる。こうした社会教育領域における“適合”の関係は、いかなる条件で成立するだろうか。スミスの分業論を基礎づける「自愛心」が人間本性としての規定に対し、ヴェーバーの場合には歴史事実として確認されている。そして、古代イスラエルの共助を「隣人愛」の具体的な行為規範を示す原初状態として想起すること、「隣人愛」が一般性の次元で抽象化された価値的な結合原理－ただし結社の原理であって、「兄弟分関係」を構成する連帯性(結社性とアンシユタルト性の両契機)ではない－として「共通善」を志向することが、重視されている。こうした外的な目的理念・行為規範のみならず、各人の人間性に「内なる光」(Nr.25, S.580)が想定されるならば、包摂性を帯びた“適合”の課題として捉えられる。「寛容」思想の具現である。その場合に、どう政府権力が関与するかどうか、あるいは「市民的」(RS I, S.202)といえる経済的エートスに依拠することができるか、という問いが提起できよう。ヴェーバーはこの点にかかわる問題意識をもち関連する史実を確認している²⁵⁾。当該史実に対するヴェーバーの認識評価はどうか、”適合”の観点のうちに包摂性を重視すれば、「政治」の契機を見出すことできる²⁶⁾。

以上のように同時代の分業論・社会分化論と対比してみると、『倫理』論文が記述した、諸個人の徹底した「孤立」の経験を前提にしながらも、互酬的交換に基づき分業し、協働する形で「共通善」を実現するという倫理的な秩序構成主体に関する社会教育は、諸個人と職業的課題との“適合”の観点が重んじられていること、この点が顕著になる。その場合、諸個人に即しての教育は、「共通善」の理念を志向し、みずからも「選ばれ」その一端に参与することができるかのようにという仮説的確信と、精神のアリストクラシーを導く自律的な自己統制の行為と

もに、相互依存性の可能性と意義を重んじていた。こうした「選び」の説は、『倫理』論文第1章「問題提起」でも着目される同時代のもう一つの選び、すなわち、経済的な「淘汰」(Auslese)の概念に対し、それを「限界」(Ebd., S. 37)づけ、「『最不適者の淘汰』」(Ebd., S. 46)が生ずる事態を批判的に問いただす。「神の無条件的服従と、所与の環境への無条件的適応とを同一視する」姿勢の一変奏として、批判的に捉えられるだろう。そうした批判力を内包したカルヴィニズムの「職業義務」の思想を構成する「選び」の説は、行為主体の志向性に即しながら緊張関係をもって発掘されていた。『倫理』論文は、以上のように経済・宗教・倫理・政治の複眼的な認識を通じて、「思想の力」と「道具感情」という人間観を構成要素とする教育思想を、近代の一つの歴史的可能性として、同時代に明るみに出していた。これもまた『古代ユダヤ教』で発掘していた、「共助」の理念で結ばれた教育共同体のように「埋もれた」歴史の可能性として提示されていた。

注

- 1) Max Weber(1920), Die protestantische Ethik und der Geist Kapitalismus, in: Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I, 5. Aufl., Tübingen: J.C.B. Mohr, 1963. (RS I). (安藤英治編『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の『精神』』梶山力訳、未来社、1994)
- . Gemeinschaften, in: MWG I /22-1, 2001.
- (1908), Erhebungen über Auslese und Anpassung (Berufswahl und Berufschicksal) der Arbeiterschaft der geschlossenen Großindustrie, in: MWG I /11, 1995. (Erhebungen). (『工場労働調査論』鼓肇雄訳、日本労働協会、1975)
- (1906), „Kirche“ und „Sekten“ in Nordamerika, in: Die Christliche Welt, 20. Jahrg., Nr. 24, 25.
- (1917-1919), Die Wirtschaft der Weltreligionen. Das antike Judentum, in: MAX WEBER GESAMT AUSGABE, Abteilung I, Bd.21-1, Tübingen: J.C.B. Mohr, 2005. (『古代ユダヤ教』内田芳明訳、上、中、下、岩波文庫、1996)
- 2) 「適合的」因果関連に対するヴェーバーの認識関心は、行為主体における価値志向、目的設定、方法の選択、現実結果の考慮等との関連で、一定の幅のなかで客観的可能性を判断する立場を指す(『ロッシャーとクニース』)。ここでは、経済から宗教への、あるいは宗教から経済への「法則的」依存関係で判断しない、という所見(RS I, S. 49, 83)を示す。同時に、経済領域と区別される非経済的領域(宗教倫理)で行為主体にどのような思想として働いたかに対する関心(禁欲的生活態度と律法との適合的因果関連、Ebd. 161など)を導くだろう。
- 3) 宗教的基礎概念と経済的日常生活原理の関連にかかわるヴェーバー・テーゼにおいて教育が重要な位置を占める点は、第2章第2節の冒頭記述(RS I, S. 163)に明示されている。その事実的根拠を教育史の立場から明らかにするため、ヴェーバーがむき合う対象に即して精細に検証し、教育学的思考の発展に対する禁欲のプロテスタンティズムの意義を考察している点で、Volkert Lehnhartの著作は貴重である。Protestantische Pädagogik und der „Geist“ des Kapitalismus, Frankfurt am Main: PETER LANG, 1998.
- 4) 大塚久雄「ヴェーバーにおける資本主義の『精神』」、大塚他編『マックス・ヴェーバー研究』岩波書店、1965、は「生産倫理」に着目し近代化擁護の面でヴェーバーを把握する。それに対し山之内靖は『ニーチェとヴェーバー』未来社、1993、p. 57、で「現世的禁欲の職業倫理こそ、事象化された資本主義的社会関係(マルクスもまたVersachlichung [物象化]を彼の『資本論』を貫く批判原理としていた点を想起!)を生みだし、形式合理的に化石化された官僚制的秩序を帰着せしめる因果的起点だとする」点に、ヴェーバーの近代化批判立場があったとする。

- 5) 内田芳明「解説」、マックス・ヴェーバー『古代ユダヤ教(下)』岩波文庫、1996、p.1079、および拙稿「M.ヴェーバー『古代ユダヤ教』における政治教育共同体の認識とその史的意義—教育の史的起源としての「魂への配慮」—」『宮崎大学教育文化学部紀要(教育科学)』第29号、2013.8、参照。
- 6) 緊急時の相互依存的な労働援助、「君が僕にしてくれるように、僕も君を助けよう」という民衆の非感傷的な原生的な倫理として、「無償の『頼み手伝い』(Bittarbeit)」をヴェーバーは『経済と社会』の「隣人団体」の項で着目している。Gemeinschaften, S.122-123.普遍的な自然的素地として、互酬の交換は位置づけられる。
- 7) 柳田園近『ウェーバーとトレルチ』みすず書房、1983、安藤英治『ウェーバー—歴史社会学の立役者—』未来社、1992、p.296.職業を遂行するという、カルヴィニズムの「功利主義の性格の根源」が、この「非人間性」から導かれると安藤は指摘する。しかし、社会的分業労働を倫理的に正当化する、という点はこの指摘からは展開されない。
- 8) 広田照幸・代表科研報告書「社会理論・社会構想と教育システム設計」2011。ヴェーバーの歴史記述は、史的な原初状態と以後(とりわけ近代)の展開であり、「現代社会論」と「規範理論」の両面にわたる。とりあげられる分業は、断片的歯車労働の側面と互惠性の規範にかかわる。その場合の互惠は、分配の正義というより、相互依存の交換が主題化される。
- 9) 先行研究から3種類の所見が目立つ。第一に、『倫理』論文で着目される「教育」の契機について。大塚は前掲論文で「世俗内禁欲のエートスによって訓練され」た「人間の類型」こそが、「合理的『経営』」の建設を内面から押しすすめる観念的要因でありえたのだ、と彼は考えた(p.183)と指摘した。ヴェーバーの教育認識を生産倫理形成に対する貢献として中核的に位置づけている点で重要であるが、その位置づけは前掲論文の終末部である。その位置づけを出発点として、どう教育認識として徹底して展開しているかを検討する必要がある。その点で、近年の、橋本直人「資本主義の精神における〈教育〉の契機」橋本勉・橋本直人・矢野善郎編『マックス・ヴェーバーの新世紀』未来社、2000、が貴重である。『倫理』論文(および関連して「教派」に関する論文)における「教育」の契機を主題として洗い出し、前注4)でふれた両面は、いずれも教育の契機で形成されていると「〈教育〉の両義性」を指摘した。的確といえる。本稿の論証も、この方向に沿うであろう。いずれの教育契機にしても、『倫理』論文において、どう教育認識として徹底して展開しているか検討することが、課題として残されている。第二に、舟山俊明『「エートス」論と教育—マックス・ヴェーバーの宗教社会学研究を手がかりとして—』『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第18号、1978、はエートス一般の教育的意味を掘り下げている。『倫理』論文に限定し検討する余地を残している。第三に、梅津順一『近代経済人の宗教的根源』みすず書房、1989、はヴェーバー・テーゼの検証を中心に、バクスター等ピューリタニズム文献を通じて社会的分業思想を論証し、関連してアダム・スミスを論じる。「交換=分業関係」を基礎づける「共感の原理」と、それに特徴づけられた「近代経済人」は、ヴェーバー・テーゼの系譜に位置づけられると論証している。その内容は重要で、どう『倫理』論文それ自身にヴェーバーの教育認識として展開しているか、検討の余地を要している。前注3)のVolkert Lehnhartの著作も、この第三に属す。
- 10) 本稿の第一義的な研究対象は、『倫理』論文上でのヴェーバー自身の認識(a)とその史的意義であって、かれが記述する歴史的对象(ルター、カルヴィン、バクスターなど)の認識内容(b)ではない。この認識内容(b)には、「職業観」などが含まれる。この認識内容(b)についてのかれの認識(a)を本稿がとりあげる場合、その認識内容(a)が示す事実的妥当性いかんは、本稿の主題とはならない。
- 11) カント「世界公民的見地における一般史の構想」『啓蒙とは何か 他4篇』岩波文庫、p.30
- 12) スミス『国富論(1)』杉山忠平訳、岩波文庫、p.38。内田義彦は、自愛心—内田の表記では「利己心」—そのものが、「強制にかかわって働くということが語られている」(傍点は内田)と指摘する(『増補経済学の生誕』未来社、1962、p.238)。そうした同感(共感)に基礎づけられた交換性向がスミスの分業論を基礎づける。

- 13) 同上、p.29。
- 14) 『資本論(2)』岩波文庫、pp.319-320。
- 15) 同上、p.407。
- 16) ここでいう“適合的”とは注2)でふれた因果連関ではなく、マッチ、ミスマッチが問題になり、どう調整し、人材育成するか、という対応関係である。拙稿「M. ヴェーバー工場労働論における教育認識の構造と特質—形成契機としての“自律化”の思想史的位相—」『教育学研究』第74巻第3号、2007。
- 17) 沢崎堅造『キリスト教経済思想史研究』未来社、1965、pp.48-49、等参照。
- 18) 梅根悟『西洋教育思想史Ⅰ』誠文堂新光社、1968、p.180、はルターが兵役義務とともに、エリートを対象としながらも義務教育制度の基本原則を示していたことを指摘している。山内芳文『近代教育概念成立史研究』亜紀書房、1994、もルター思想を近代教育の系譜に位置づける点では梅根に等しいが、山内の中心的関心は学校教育論ではなく、家族論のなかの親子関係論である。ルターは婚姻を積極的に意義づけるとともに、夫と妻が協力して「養育」しなければならないとする親子関係論を展開し、そのことによってカント、ヘーゲルなどドイツ家族論の系譜のなかに近代教育概念（両親の自然的義務としての養育と教育）が形成していく端緒に位置づけられることを、山内は論じた。菱刈晃夫『ルターとメランヒトンの教育思想研究序説』漢水社、2001、は「近代教育」(p.15)の観点ではなく、宗教者としてのルター神学思想に内在することによって、キリスト者形成にむけた両親の教育責任についてのルターの主張を明らかにしている。こうした先行研究が示すように、近代教育の形成いかにに対する関心には研究者の間で差異があるが、「教育」の所見を見出す点では共通している。ヴェーバーの場合、『倫理』論文それ自身に限定すれば、社会史的事実そのなかのBeruf(職業・使命)観に焦点を当てながら、どう近代教育思想が成立するか、という点に関心がむけられている。
- 19) W. ジェームズ『宗教的経験の諸相』をヴェーバーは引用(RS. I, S.111-112)し、検証を促す仮説的確信について、教育学的と解しうる意義を理解している。W. プレツィンカ『信念・道徳・教育』玉川大出版部、1995、pp.75-77、を参照。
- 20) 拙稿、注5)の論文。
- 21) 禁欲的プロテスタンティズムを中世カトリシズムとの対比よりも、非禁欲的なプロテスタンティズム(神秘主義としてのルター主義)との「教育作用」の対比をヴェーバーが際立たせようとしていたという点で、同時代のプロイセン・ドイツの国民性に対するヴェーバーの批判—民主主義と個人主義の担い手にたりうるか、という問題提起—の意図を読みとることもできる。今野元『マックス・ヴェーバー』東大出版、2007、pp.175-176、Wolfgang Schluchter, *Die Entzauberung der Welt*, 2009, Tübingen: Mohr Siebeck, S. 59、など参照。本稿で史的意義を把握する場合には、現実の教育状況に対してではなく、理論的に、「職業」と人間の問題にかかわる教育認識の視野で検討したい。
- 22) E. Troeltsch (1911), *Epochen und Typen der Sozialphilosophie des Christentums*, in: *Gesammelte Schriften*, 4. Bd. S. 147 (トレルチ「キリスト教社会哲学の諸時代・諸類型」(1911)『トレルチ著作集』第7巻、ヨルダン社、p.222)。
- 23) デュルケム『社会分業論(下)』講談社学術文庫、1989、p.265。
- 24) G. Simmel, *Über soziale Differenzierung*, Leipzig: Duncker & Humblot, 1890 (ジンメル『社会的分化論』中央公論新社、2011)
- 25) 「政府による貧民救助と失業者への労働供給との原理を系統的に発達させた」政治の例(RS I, S.177)として、英国スチュアート朝時代、ことにウィリアム・ロードの政治にヴェーバーは、ピューリタニズムと対比して批判的にふれる。「施し」や「乞食」ではなく、「自己の技能と創意を通じての個人主義的な起動力」の契機がこの事例では欠如していたとした。
- 26) ただし、『古代ユダヤ教』でヴェーバーが発掘した「兄弟分関係」の「連帯」の思想—共同で負荷を引き継ぎ、苦難を共有する、という思想—は、『倫理』論文でかれがとりあげた禁欲的プロテスタンティズムの範囲では確認されず、未発の契機にとどまっている。その点を注視するならば、対象に見出されるこの包摂の事例は限界性の要素を含んでいる。

Max Weber's understanding on education for social division of Labor in 'the Protestant Ethic' and its historical significance : The principle of reciprocity and 'common good' of society

Kunio KAWAHARA

Keywords : common good, selection, care of soul, reciprocity, social division of labor

Max Weber argued in *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism* (1920) that the old ascetic Protestantism played a key role in creating the entrepreneurial spirit of modern Western capitalism (ie : Weber thesis). In the last pages, Weber sketched the worker of today, 'he subordinates himself as an obedient administer, or even an acquisitive machine'. However at the same place he commented, 'Will there be a great rebirth of old ideas and ideals?'.

Previous Studies (Volkert Lehnhart, Jun'ichi Umezu), which quested for an educational moment in *The Protestant Ethic*, tried to follow up the Weber thesis by dealing with the same objects of research. In this paper, focusing on how Weber paid much attention to education and its historical development in *The Protestant Ethic* itself, I aimed to clarify his understanding on educational consciousness in ascetic Protestantism and its historical significance. The approach adopted is to probe into his notion that 'the belief that they were God's chosen people saw in them a great renaissance', and to compare his understanding with descriptions on education in sociology in his own time.

According to Weber the educational ideas of Calvinism were described as follows :

- 1) A single individual, having feelings of unprecedented inner isolation, can prove himself as not the 'vessel' of the holy spirit but the 'tool' of the absolutely transcendental being(God).
- 2) For that purpose each individual must devote himself to inner-worldly vocational labor as the fulfillment of worldly duties, in which he could realize the moral well-being in his whole life.
- 3) Each individual should pay regard not only to himself by rational self-control but also to others by social division of labor, which is characterized as the 'common good' of society.

In order to probe into Weber's understanding in *The Protestant Ethic*, I compared it with his description of education in *Ancient Judaism*. Both had some similarities at the point of 1) teaching of selection, 2) ideal of neighborly love and 3) care of soul .

From the viewpoint of these aspects the education in ascetic Protestantism are featured as follows :

- 1) Though the doctrine of predestination on individual 'selection' seemed to fatal, it produced a self-education which was oriented to 'pragmatic' effort for the reason that their belief must function as hypothesis for vocational life.
- 2) Reciprocal aid through division of labor had been explained as the realization of 'common good' of society. Through abstraction, reciprocity could succeed in being valued universally as an 'impersonal' idea, and at the same time demanded acknowledgement of the passage regarding "stubble" in Deuteronomy(24 : 19) which teaches the poor how to keep interdependency by personal relationships.
- 3) Each person's ascetic lifestyle was oriented not to endure suffering but to keep autonomous self-

control which demands a formal legality of lifestyle and could attain spiritual aristocracy.

Weber's understanding was an answer to the question of how each individual becomes a member of society adding to the 'common good' by social division of labor. Comparing it with notions on education in sociology in his own times (Troeltsch, Durkheim, Gimmel), it was revealed that Weber traced out the endeavor of appropriate coordination between qualities of each individual and divided vocational tasks in the history of ascetic Protestantism. Weber, pointing out that the coordination, rather than an economic policy, had been a cultural and political policy and that there is a limit to the of concept of economic 'selection' through survival of the fittest, suggested the importance of educational thought toward another possibility of 'selection' from the ethical and political viewpoint.